

『バウム・テスト整理表』の作製とその具体的利用

一 谷 彊・津 田 浩 一

Preparation of Baumtest Tabulation Sheet and Its Practical Application to Clinical and Research Study

Tsuyoshi ICHITANI and Koichi TSUDA

Received April 30, 1982

I 導 入——序にかえて——

バウムテストは、1949年に K. コッホによってドイツ語版の『バウムテスト』(Karl Koch: Der Baumtest; Der Baumzeichnenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern; Hans Huber, 1949) が出版され、1952年にその英訳版 (Charles Koch: The Tree Test; The Tree-Drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis. Bern; Hans Huber, 1952) も相ついで出版された。そして、この邦訳書が1970年に林勝造・国吉政一・一谷彊によって公刊された (C. コッホ著: 林勝造・国吉政一・一谷彊訳「バウム・テスト——樹木画による人格診断法——」東京: 日本文化科学社, 1970)。

この間、現在までに多くの基礎的、臨床的研究が発表され、その臨床的有効性が認められて、このテストを利用する臨床家や機関も増加してきたように思われる。また各地でこのテストの研究会や研修会ももたれるようになってきた。こうした成果のひとつとして、1973年には、林勝造・一谷彊によって「バウム・テストの臨床的研究」(東京: 日本文化科学社) が公刊された。その他、1966年には、カトリック・マリア会東京管区教育部から、事例を中心とした「シャル・コシュの『木のテスト』の解明」が出版されているし、1978年には、吉川公雄による「人間生態学」という著書の中で、バウムテストを活用した報告が大きくとりあげられて出版されている。こうした経過のなかで、最近では、原著者 Karl Koch の息女である Regla Koch 女史と邦訳版「バウム・テスト」の訳者のひとりである林勝造との密接なコミュニケーションのもと、Koch 女史とともに林勝造・国吉政一・一谷彊・津田浩一・齊藤通明が中心となって、1981年に「バウムテスト事例解釈法」(東京: 日本文化科学社) が出版され、我が国においては、「バウム・テスト」

ここに報告する報告する「バウム・テスト整理表」とその「手引」は、林 勝造・国吉政一・一谷 彊・津田浩一・齊藤通明の以上5名の協同研究によって、日本文化科学社(東京)から1980年に公刊されたが、ここでは、これら協同研究者を代表して、一谷と津田とがその具体的内容を報告するとともに、臨床的な場面やリサーチ的研究に適用するさいの具体的な方法を事例をあげて説明するものである。なお、この報告はすでに津田浩一(1980a, 1980b) が報告したものに一部加算修正を加えてここに報告するものである。

(邦訳版)、「バウム・テストの臨床的研究」とともにあわせてバウムテストの3部作が出来し、一応のまとまりをもったものとなった。

このように、バウムテストは、我が国に1961年京都洛北の精神科Y病院で久保喜蔵院長をはじめとする国吉政一・篠原大典・津田舜甫・小池清廉らの精神科医によって臨床場面に導入されるようになってほぼ20年の歳月を経て全国的に普及していった投影法のひとつとしての心理テストである。

しかしながら、このテストの実施法の簡便さのゆえに、往々にして規格外の用紙を使用して、単なる印象的解釈に基づいて安易に利用されて、コッホの挙げている各項目の判断基準が曖昧にとらえられて解釈されたり、心理検査としての基本的諸条件が不徹底なままに使用されたりしていることも多く見受けらるようになってきていることも否定できない事実のようにうかがえる。このテストを、かけがえのない被検者に、今後ともあやまらなく実施して解釈していくうえで、各検査者のあいだで共通した基準をもって、診断の補助的手段として利用していくことが、本テストの発展のためにも極めて重要な不可欠の条件である。同時に、本テストを利用している臨床家や研究者達からも、かねがね規格化された「整理表」公開の必要性が希求されていた。

そこで、我々（国吉政一・林 勝造・一谷彊・津田浩一・斉藤通明）は、かつてより国吉政一らによって、上記の方向に沿った試みがなされてきていたものをもとに、ほぼ2年有余にわたって種々の検討を重ねてきた。当初、これらの協同研究者たちは、いずれも永年にわたって臨床的にも研究的にもバウムテストを活用してきているゆえ、案外簡単に出来るものと考えていたが、率直なところ、コッホの提示している項目のとり方ひとつひとつについても、その採択基準の判断の仕方にかなり相違や齟齬のある項目があったりして、より一層、一定の共通した基準をもった「整理表」の作製の必要性を痛感したのであった。こうした検討の成果を公表しうる段階に到ったので、ここに「バウム・テスト整理表」（東京：日本文化科学社、1980）についてその概略を説明しつつ、利用の仕方の実際を示すことによって、「バウム・テスト整理表」の概説を試みることにしたい。

II 目 的

上述してきたように、コッホの「バウム・テスト」（邦訳版）や、「バウム・テストの臨床的研究」及び「バウム・テスト事例解釈法」などの本を活用しつつ解釈していくうえで、先ず要請されることは、コッホの示す判断の各項目を确实かつ忠実にチェックできるようにするとともに、その判断基準を明確化して一覧表にすることであろう。同時に、過去の研究成果に基づいて、チェック項目とすることが望ましいと思われるものをも付加して、解釈の前提条件となる共通の項目をチェックできるようにすることが、この「バウム・テスト整理表」の製作の目的である。

III 利用の方法

この「バウム・テスト整理表」は、同時に公刊されている「バウム・テスト整理表——手引——」（東京：日本文化科学社、1980）と、これと併せて準備されている「空間利用の領域」を測定するための、画面を縦に3分割、横に3分割、合計9分割にした「透明なシート」と、「所見票」

とがセットになっており、それに、コッホの「バウム・テスト——樹木画による人格診断法」を十分に活用して利用すればよい。そこで、次に、「バウム・テスト整理表」の内容的構成についてみてみよう。

IV 「バウム・テスト整理表」の構成と利用の「手引」

「バウム・テスト整理表」の構成は、大きくは10の範疇に分類されており、それらがさらに細かく下位分類されたのちに、チェック項目を列挙する形をもっている。それらを示すと次のようになる。すなわち、

1. 全体的所見		7. 幹	I 構成	4 (項目)
I 状況	8 (項目)		II 幹の位置 A	8
II 利き手	4		III 幹の位置 B	8
III 紙の向き	3		IV 種類	7
IV 木の数	5		V 太細	3
V 表現形式 A	4		VI 経過	7
VI 表現形式 B	2		VII 輪郭	7
VII 表現形式 C	2		VIII 幹表面 A	9
VIII 空間利用の領域			IX 幹表面 B	6
IX 強調 A	4	8. 枝	I 枝の数	5
X 強調 B	3		II 構成	6
XI 傾向	3		III 枝方向・経過 A	6
XII 傾斜	3		IV 枝方向・経過 B	11
2. 風景および附属物	15		V 枝方向・経過 C	12
3. 地平			VI 枝方向・経過 D	7
I 地平線	11		VII 枝方向・経過 E	5
II 地面	8	9. 冠	I 輪郭	10
4. 地平と木との関係	3		II 内容	10
5. 幹の基部	10		III 特殊型	13
6. 根		10. 果・花・葉		
I 根の数	5		I 果・花・葉	9
II 構成 A	5		II 所見 A	12
III 構成 B (領域)			III 所見 B	6
IV 構成 C (形態)	10			
V 特殊型	8			

の如くである。このほかに「各種参考指標」として、以下の5つの範疇を解釈の一助となるようにと挙げてある。すなわち、

I 発達遅滞と退行	IV Grünwald の空間図式
II 運筆の動態分析 (運筆における解釈仮説)	V Wittgenstein 指数
III 樹木の発達 (幹と冠の比率)	

「バウム・テスト整理表」の構成上の骨格となっているのは以上の如くである。「バウム・テスト整理表」は、具体的には、表1-1から表1-4までに示すような形式となっている。

なお、これらの表1-1から表1-4までの「バウム・テスト整理表」に関して、若干の補足と注釈を付加しておこう。すなわち、

表1-2 「バウム・テスト整理表」 (つづき)

風附 景 お も の 物	13. 太陽		根	* 1. 透写根 (レントゲン描写)	
	14. 人物			* 2. 平行根 (ずっと同じ太さの根)	
地	15. その他			* 3. 瘤状根	
	I 地平線			* 4. 蛇行根	
	1. 地平線なし			5. 先へいくほど太くなる根 (すりこぎ型)	
	* 2. 暗示			* 6. 渦状根	
	3. 傾斜 (左上) (P.103 図81)			* 7. 爪状根	
	4. 傾斜 (右上) (P.103 図81)			8. その他	
	5. 水平 (一線)			I 幹の位置 A (X軸) (8分割) (添付のシート使用)	
	6. 水平 (断線)			1. 幹なし	
	* 7. ブッシュ (ブッシュが地平)			2. 一線幹	
	8. 波状			3. 二線幹 (断線あり) (P.59 図9)	
	9. 島状または丘状 (P.104 図82, 83)			4. 二線幹 (断線なし)	
平	* 10. 複数の地平線		幹	II 幹の位置 B (Y軸) (8分割) (添付のシート使用)	
	11. その他			1. 左出	
	II 地面			2. 左 (1,2,3, 領域の系列)	
	1. 陰影なし			3. 左中 (1,2,3,4,5,6, 領域の系列)	
	2. 陰影			4. 中 (4,5,6, 領域の系列)	
	* 3. 線影			5. 右中 (4,5,6,7,8,9, 領域の系列)	
	4. 黒塗り (塗りつぶし)			6. 右 (7,8,9, 領域の系列)	
	5. ブッシュのみ			7. 右出	
	6. 木の影			8. 充溢 (いっぱい) (左, 中, 右)	
	7. 広さ (地面面積大) (2,5,8 領域より上に描かれたもの)			III 幹の位置 B (Y軸) (8分割) (添付のシート使用)	
	8. その他			1. 上出	
幹の基部 (根元)	1. 地平線が幹の基部より上にある場合 (P.103 図79)			2. 上 (1,4,7, 領域の系列)	
	2. 幹線が地平に移行 (P.103 図80)			3. 上中 (1,4,7,2,5,8, 領域の系列)	
	3. その他			4. 中 (2,5,8, 領域の系列)	
	1. 紙下線立 (P.57 図3)			5. 下中 (2,5,8,3,6,9, 領域の系列)	
	* 2. 幹下直 (P.122 図6)			6. 下 (3,6,9, 領域の系列)	
	* 3. 幼児型 (2,4,7,8 領域の系列)			7. 下出	
	4. 左ふくらみ (P.58 図4)			8. 充溢 (いっぱい) (上, 中, 下)	
	5. 右ふくらみ (P.58 図5)			IV 幹の位置 C (Z軸) (8分割) (添付のシート使用)	
	6. 広い基部 (P.58 図6)			1. T 幹 (マツ科型) (P.56 図2)	
	7. くさび型 (P.58 図7)			2. 半 T 幹	
	8. 根元わかれ型 (P.59 図8)			3. 平行幹 (P.63 図19)	
根	9. 普通			4. つき木した幹 (P.80 図45)	
	10. その他			* 5. はんだづけ幹 (幹上直) (P.122 図7)	
	I 根の数			6. 円錐幹	
	1. 根なし			* 7. 十字型	
	2. 一本			V 太さの細さ (太さの系列)	
	3. 二〜三本			1. 太 (指三本以上)	
	4. 四本以上			2. 細 (指一本以下)	
	* 5. 多数			3. 普通	
	II 構成 A			VI 幹の太さ (太さの系列)	
	1. 一線根 (断線あり)			1. ふくらみ (P.64 図20)	
	2. 一線根 (断線なし)			2. くびれ (P.64 図21)	
	3. 二線根 (断線あり)			3. 先へいくほど太くなる幹	
	4. 二線根 (断線なし)			4. 管状幹 (上開放) (P.74 図38)	
	* 5. 混合			5. 管状幹 (上下開放) (P.74 図38)	
	III 構成 B (領域)			6. さまよい型 (P.82 図48)	
	IV 構成 C (形跡)			7. その他	
	* 1. 長 (ながい)			VII 幹の太さ (太さの系列)	
	* 2. 短 (みじかい)			1. 直線	
	* 3. 太 (ふとい)			2. 波線 (P.60 図12)	
	* 4. 細 (ほそい)			3. 放線 (P.60 図13)	
	5. 開 (先が開いている) (P.55 図1)			4. 断線 (P.59 図9)	
	6. 閉 (先が閉じている) (P.55 図1)			5. 幹左様不規則 (P.59 図10)	
	7. 陰影あり			6. 幹右様不規則 (P.59 図11)	
	8. 陰影なし			7. その他	
	9. 直根			VIII 幹の太さ (太さの系列)	
	10. 曲根			1. 白 (空白)	
				2. きず (P.61 図14)	
				3. 線 (尖角直, ぎざぎざ) (P.61 図14)	
				4. 曲線 (カーブ, 弧) (P.61 図15)	
				5. しみ (P.61 図16)	
				6. 左陰影 (P.62 図17)	
				7. 右陰影 (P.62 図18)	

表1-3 「バウム・テスト整理表」 (つづき)

幹	8. 全陰影 (塗りつぶし) (P.86 図55)	枝	5. その他	
	9. その他		Ⅰ. 輪 葉	
	Ⅱ. 幹・葉・花・果		1. 雲・ボール型冠 (P.68 図28)	
	1. 切り口		2. 枝先雲球状冠 (P.69 図30)	
	2. 瘤		3. アーケード型冠 (連線) (P.70 図31)	
	3. 凹み (へこみ)		4. アーケード型冠 (断線)	
	4. 洞 (ほころ)		5. 螺旋状冠 (P.76 図40)	
	5. 魚鱗		6. 放射線状冠 (顯形) (P.73 図36)	
	6. その他		* 7. 枝葉型冠	
	* Ⅰ. 枝 の 数		* 8. 波状連線型冠	
枝	1. 枝なし	冠	* 9. 波状断線型冠	
	2. 一本		10. その他	
	3. 二本		Ⅱ. 内 容	
	4. 四本以上		1. 線形冠 (P.85 図54)	
	5. 多数		2. 陰影冠 (P.85 図54)	
	Ⅲ. 構 成		3. 纏(線)線状冠 (P.77 図41)	
	* 1. 一線枝 (分枝なし)		4. 求心枝冠 (P.72 図34)	
	* 2. 一線枝 (分枝あり) (P.79 図43)		5. 遠心枝冠 (P.72 図35)	
	* 3. 二線枝 (分枝なし)		6. 散在管状枝冠 (P.75 図39)	
	* 4. 二線枝 (分枝あり) (P.79 図43)		7. 微細分化枝冠 (P.79 図44)	
枝	* 5. 混合 (一線枝・二線枝の)	果	8. 対立枝冠 (P.98 図75)	
	6. その他		9. ずれ括弧枝冠 (P.99 図76)	
	Ⅳ. 枝方向・経過A		10. その他	
	* 1. 全上向枝		Ⅲ. 幹・葉・花・果の略示	
	* 2. 全下向枝		1. 袋垂れ下がり型冠 (P.67 図26)	
	3. 右上向・左下向枝 (P.88 図56・57)		2. 羊頭型冠 (P.69 図29)	
	* 4. 左上向・右下向枝		3. 棚状・盆栽型冠 (P.71 図33)	
	* 5. 水平方向枝		4. 同心円冠 (P.74 図37)	
	* 6. 混合 (上向・水平・下向)		5. 角ばった冠 (P.81 図47)	
	Ⅴ. 枝方向・経過B		6. 押しつぶされた冠 (P.96 図72)	
枝	1. 逆向きの枝 (P.89 図58)	果	7. 空白・白黒冠 (P.96 図70・71)	
	2. 変化した枝 (P.89 図59)		* 8. 十字架型冠	
	3. 枝交差における枝の不連続性 (P.90 図60)		9. 吹き流し型冠 (P.82 図49)	
	4. たわみ枝 (くわり) (P.97 図73)		10. 棕櫚型冠 (P.70 図32)	
	5. さまよい枝 (P.82 図48)		* 11. 西洋梨型冠	
	6. 方向のない結合枝 (P.83 図50)		* 12. 火炎型冠 (P.66)	
	7. 絞切り型の枝 (P.83 図51)		13. その他	
	8. 直線と角ばりの枝 (P.84 図52)	花・葉	Ⅰ. 果・花・葉	
	9. 丸い形の枝 (丸味) (P.84 図53)		* 1. 果・花・葉なし	
	10. ふくらみのある枝 (P.64 図20)		2. 果のみ	
	11. くびれのある枝 (P.64 図21)		3. 花のみ	
	Ⅵ. 枝方向・経過C		4. 葉のみ (P.105 図85)	
	1. 調和ある枝 (P.83)		* 5. 果と花	
	2. 不連続線枝 (P.78 図42)		* 6. 花と葉 (P.104 図84)	
	3. 切り取られた枝 (枝先直) (P.94 図68)		7. 果と葉 (P.107 図88)	
	4. 直交枝 (P.81 図47)		* 8. 果・花・葉	
	5. 重積枝 (P.81 図46)		* 9. 果・花・葉の略示・あいまい	
枝	6. 支えられた枝 (P.94 図67)	花・葉	Ⅱ. 所 見・A	
	7. 冠下枝 (冠より下から出た枝) (P.67 図27)		1. 空間倒置Ⅰ (P.123 図9)	
	* 8. 地平までの一線枝 (Aste bis zum Boden)		2. 空間倒置Ⅱ (P.123 図10)	
	* 9. 枝立体描写		3. 空間倒置Ⅲ (Ⅰ・Ⅱの混合)	
	10. 切り口前突枝 (P.95 図69)		4. 果・花・葉の常同 (P.83 図51)	
	11. 前方突出枝 (P.98 図74)		5. 果・花・葉の重積 (P.81 図46)	
	* 12. 切り口側枝 (立体描写)		6. 落葉(落下浮遊) (P.106 図86)	
	Ⅶ. 枝方向・経過D		7. 落果(落下浮遊) (P.106 図87)	
	1. 管状枝=開放形 (P.74 図38)		8. 冠中浮遊果 (P.108 図89)	
	2. 平行枝 (P.65 図23)		* 9. 過大 (果・花・葉)	
枝	3. 先へいくほど太くなる枝 (すりこぎ型) (P.65 図23)	花・葉	* 10. 黒塗り (果・花・葉)	
	4. 棕櫚状枝 (P.70 図32)		* 11. 地面に落ちている (果・花・葉)	
	* 5. 刀型枝		12. 裂果 (ざくろ型)	
	* 6. 尖状枝		Ⅲ. 所 見・B	
	7. 変質型		* 1. おくらば (病葉)	
	Ⅷ. 分枝方向・経過E		2. 花弁	
	1. 分枝なし		3. 蕾 (つばみ)	
	2. 微細分化した分枝 (P.79 図44)		4. いが	
	* 3. 直交分枝 (P.123 図8)		5. パナナ	
	* 4. はんだづけ分枝 (分枝先直)		* 6. 主題転換	

表1-4 「バウム・テスト整理表」 (つづき)

各種参考指標

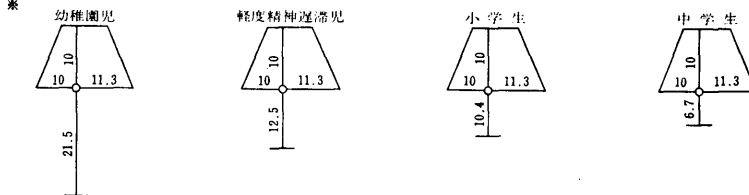
I 発達遅滞と退行 (P.108~109)

1. 幹下直立 (P.57 図3)	
2. T幹、特に枝が下方についている (P.56 図2)	
3. つぎ木した幹、部分的に「ついだ」ような枝 (P.80 図45)	
4. 非常に小さい冠部(マッシュルームのような冠部が長いすれかの太い幹の上に) (P.66図25)	
5. 冠下枝 (冠より下から出た枝) (P.67 図27)	
6. 放射線状冠 (一線枝)	
7. 一線幹	
8. 一線枝 (P.79 図43)	
9. 吹き流し型冠 (P.82 図48・49)	
10. 重横枝 (P.81 図46・47)	
11. 方向のない結合枝 (P.83 図50)	
12. 風景の強調 (P.101 図77)	
13. 幹の根元がまっすぐである (意味は軽い)	
14. 紋切り型の枝 (P.83 図51)	
15. 明暗 (P.85 図54, P.86 図55)	
16. 角ばった冠 (P.81 図47)	
※17. 冠形成不全 (冠形成の幼児型)	

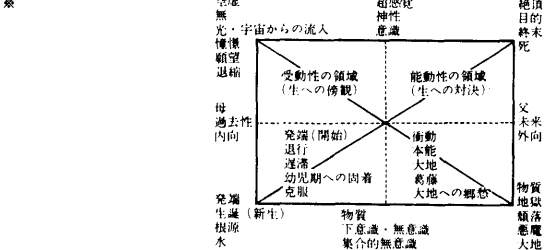
II 筆の動態分析(筆画における解釈仮説) (P.99~100, P.133~137)

	Positiveな側面	Negativeな側面
1. 急 速	活 動 欲 ・ 感情生動性	不 穏 ・ 感情興奮性
2. 遅 緩	静 穏 ・ 平 静 化	不 活 発 ・ 冷 淡
3. 弱 圧	敏 捷 ・ 繊 細 さ	意志薄弱 ・ 不安定性
4. 強 圧	意 志 力 ・ 抵 抗 感	鈍 重 ・ 短 気
5. 潤 (個)	生のよろこび ・ 直 観 性	放 縦 ・ 粗 野
6. 渴 (直)	自己統制力 ・ 精 神 性	禁 欲 的 ・ 概 念 性
7. 連 綿	論 理 性 ・ 組織的思考	思想貧困 ・ 移 り 気
8. 分 離	思想豊富 ・ 直 観 能力	飛 躍 性 ・ 抽象力欠乏
9. 飾りたて		喝采願望 ・ 自 画 自 賛
10. おさなり		非厳密性 ・ 狡 猾

III 樹木の発達 (幹と冠の比率)



IV Grünwaldの空間図式



V Wittgenstein 指数 (「バウム・テスト事例解釈法」参照)

もに変化することを詳細な資料をあげて示しているので参考資料として提示した。また、冠部そのものの比率は発達と関係がないことが示されている。山下真理子 (1981) はこれらの点について詳細な検討を我が国の幼児・児童を対象として行なっている。

そこで次に、「バウム・テスト整理表——手引——」の内容を表2-1 から表2-6 までに示すことにしたい。

表2-1 「バウム・テスト整理表——手引——」

はじめに

バウム・テストは、実施が手間取らず、しかも集団にも用いられることなど、手続きが簡単なことから、最近、利用者がとみに増している。そして、臨床部門をはじめ種々の分野での研究が報告されるようになり、人格特徴を把握するうえで、その有効性が実証されてきている。

しかし、描かれた樹木画をより客観的に、かつ綿密に分析するための整理表や、一定の解釈手順に則った所見票がなく、また画用紙の大きさや材質も不揃いのために、利用者から、かねがね規格化されたものを市販して欲しいとの声が寄せられていた。

そこで、今回、樹木画の特徴を、より細かく、正確に、そしてそれらが利用者間の共通の情報として把握できるように、この整理表を作成した。

I 実施法

実施の方法は、『バウム・テスト—樹木画による人格診断法—』（日本文化科学社）の「バウム・テストの実施」（P.118）に従う。

① 実施にあたって留意すべき点

- (1) 被検者の緊張をほぐし、まじめさを欠いてはならないが、できるだけリラックスした状態でテストが受けられるように配慮すること。
 - (2) 他のテストと組み合わせて実施する場合は、バウム・テストを最初に行うことが望ましいが、もしそれが不可能なときは、先に行ったテストの疲労感が残っていないかどうかを十分に確かめること。
 - (3) 集団法の場合、机の間隔をなるべく離し、隣席者の描画を容易にのぞき込めないように配置すること。
- ### ② 描画中は、検査者は描画過程をよく観察していなければならないが、そのために、被検者に「監視されている」という印象を与えてはならない。また、描画中に被検者から質問があった場合は自由に描くことを強調し、描画方法に関しては一切制限してはならない。
- ### ③ 描画が終わったら、次の手続きを取る。
- (1) まず、画用紙の裏面に、上記の「バウム・テストの実施」に従い、姓名、生年月日、性別などを書くように指示する。
 - (2) 次に、描画についての質問を行う（たとえば、何の木を描いたのか、この木はどんな木か、また、描かれたものが不明確な場合、それが実であるのか、それとも葉であるのか、など）。
 - (3) そのほか、テスト状況、被検者の内省報告など、必要事項をまとめて裏面の余白に付記しておく。

表2-2 「バウム・テスト整理表——手引——」 (つづき)

II 整 理 法

この整理表は、コッホが掲げた項目に、さらに数項目を加え、よりきめ細かく特徴が把握できるように充実を期した。

① 整理表の記入の仕方

- (1) 該当項目のチェック欄に✓印をつけていけばよいのであるが、さらにラインマーカーで項目の活字を塗っておくと大変見やすい。
- (2) また、項目の右側の余白に解釈仮説を書き入れておくと、あとの解釈に便利である。

② 項目についての説明

	項 目	内 容	図 示 例
全 体 的 所 見	I ₁ 拒 否	途中放棄を含む。	
	I ₂ 課 題 外	樹木以外の、全く違ったものが描かれている場合で、風景画の中に樹木が描かれているものは含まない。	
	I ₃ 描き直し	先に描きかけていたものを途中でやめ、新たに描き直した場合、消しゴムを使用した場合などを指す。	
	I ₄ 15分以上	所要時間が15分以上経過したもの。	
	I ₅ 30分以上	所要時間が30分以上経過したもの。	
	I ₆ 後から提出	集団法において、みんなが描き終わり、画用紙を集めたとき、まだ完成できず、あとから提出した場合などを指す。	
	I ₇ 命 名	自発的に樹木の名称が記されている場合を指す。	
	V ₁ 錯 画	1歳前後から3～4歳頃に見られるような、いわゆるなぐり描き(スクリブル)で、樹木の形態が未形成であるもの。この場合「I ₂ 課題外」ではとらない。	
	V ₂ 象 徴 画	たとえば、擬人画のように、樹木以外のものが象徴して描かれているもの。この場合「I ₂ 課題外」とは異なる。	
	V ₃ 図 式 画	3～4歳頃から7～8歳頃に多く見られるような、図式的に描かれているもの。	
	V ₄ 写 実 画	写実的に描かれているもの。	
	VI ₁ 立体描写	枝などの交叉(P.89 図59, P.90 図60), 前方に突き出た枝(P.95 図69, P.98 図74), 幹の陰影(P.62 図17, 18)など立体的に描かれているもの。	

表2-3 「バウム・テスト整理表——手引——」（つづき）

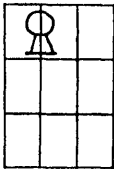
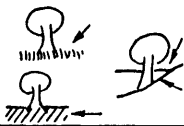
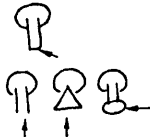
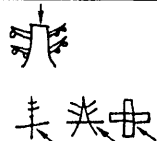
	項 目	内 容	図 示 例
全体的所見	VI ₂ 遠近描写	樹木の前方あるいは後方の風景や附属物などによって遠近感が示されている場合を指す。	
	VII ₁ 図案画	樹木が図案化されて描かれているもの。	
	VIII 空間利用の領域	添付のシートを画面の上に当てて使用のこと。	
	IX ₃ その他の強調()	ただし、1/2に満たない場合は図示する(右図参照) たとえば、根とか枝が強調して描かれている場合、それを()内に書き入れる。	
地平	I ₂ 暗 示	明確な地平線は描かれていないが、たとえば、海や川などによって地平が暗示されているもの。	
	I ₇ ブッシュ	芝生やかん木様のもので地平が示されているもの。	
	I ₁₀ 複数の地平線	地平線が2本以上描かれているもの。	
	II ₃ 線 影	陰影が特に線で描かれているもの。	
幹の基部	2 幹下直	幹の下端がハンダづけされたように閉じられているもの。	
	3 幼児型	「2 幹下直」以外の幼児に多く見られる基部を指す。	
根	I ₅ 多 数	特に目立って数多く根が描かれているもの。	
	II ₅ 混 合	先の「II ₁ ~4」の混合を指す。	
	IV ₁ ~4 長,短,太,細	特に基準は設けていないが、樹木全体のバランスから判断して顕著なもの。	
	V ₁ 透写根	地平線の下に、あたかもレントゲン写真のように根が透写して描かれているもの。	
	V ₂ 平行根	ずっと同じ太さの根。	
	V ₃ 瘤状根	根に瘤のあるもの。	
	V ₄ 蛇行根	蛇のように曲がりくねった根。	
	V ₆ 渦紋状根 V ₇ 爪状根	うずまき状の根。 鷲手のような根。	
幹	IV ₅ はんだづけ幹	幹の先端がはんだづけされたように閉じられているもの。	
	IV ₇ 十 字 型	幼児に見られる十字架のように、主枝が幹に直角に交叉しているもの。	
枝	I 枝 の 数	幹から直接に描かれている枝(主枝)を数え、分枝は含まない。	
	II ₁ 一線枝(分枝なし)	主枝がすべて一線で描かれており、分枝が描かれていないもの。	

表2-4 「バウム・テスト整理表——手引——」（つづき）

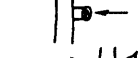
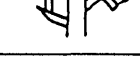
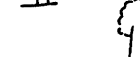
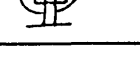
項 目	内 容	図 示 例
II ₂ 一線枝(分枝あり)	主枝がすべて一線で描かれており、さらに分枝が描かれているもの。	
II ₃ 二線枝(分枝なし)	主枝がすべて二線で描かれており、分枝が描かれていないもの。	
II ₄ 二線枝(分枝あり)	主枝がすべて二線で描かれており、さらに分枝が描かれているもの。	
II ₅ 混合(一・二線枝の)	主枝が一線枝と二線枝が混在して描かれているもの。	
III ₁ 全上向枝	主枝のすべてが一線枝・二線枝にかかわらず上向きの枝で描かれているもの。	
III ₂ 全下向枝	主枝のすべてが一線枝・二線枝にかかわらず下向きの枝で描かれているもの。	
III ₄ 左上向・右下向枝	主枝のすべてが、幹の左側が上向きの枝となり、右側が下向きの枝となっているもの。	
III ₅ 水平方向枝	主枝が水平の方向に描かれているもので、1本だけであってもチェックする。	
III ₆ 混 合 (上向・水平・下向)	主枝の描かれた方向に一貫性がなく、混在している場合にチェックするが、その場合、どの種の混在であるかを()内のいずれかにチェックする。	
V ₈ 地平までの一線枝 (Äste bis zum Boden)	主枝がすべて一線枝で地平まで描かれているもので、枝の方向は水平方向枝でなくてもよい。	
V ₉ 枝立体描写	主枝が三次元的に表現されているもの。	
V ₁₂ 切り口側枝 (立体描写)	主枝のうち切り取られた枝が幹の側方にあり、立体描写となっているもの。	
VI ₅ 刀 型 枝	主枝の形が刀型・青竜刀型に描かれているもの。	
VI ₆ 尖 状 枝	主枝や分枝の先端が鋭く尖っているもの。	
VI ₃ 直交分枝	主枝から出ている分枝が直角の方向に描かれているもの。	
VI ₄ はんだづけ分枝 (分枝先直)	分枝の先端がはんだづけされたように、あるいは切り取られたようになっているもの。	
I ₇ 枝葉型冠	冠の構成が枝と葉だけでなされているもの。	
I ₈ 波状連続線型冠	冠の輪郭線が波状に描かれ、かつ連続線で描かれているもの。	
I ₉ 波状断線型冠	冠の輪郭線が波状に描かれ、かつ断線で描かれているもの。	
III ₈ 十字架型冠	冠に十字架が描かれているもの。	

表2-5 「バウム・テスト整理表——手引——」（つづき）

	項 目	内 容	図 示 例
冠	III ₁₁ 西洋梨型冠	冠が西洋梨の形をしたもの。	
果	I ₁ 果・花・葉なし	果・花・葉が全く描かれていないもの。	
・	I ₅ 果 と 花	果と花だけが描かれているもの。	
・	I ₆ 花 と 葉	花と葉だけが描かれているもの。	
・	I ₈ 果・花・葉	果・花・葉が共に描かれているもの。	
・	I ₉ 果・花・葉の暗示・あいまい	果・花・葉が、一つあるいはすべてが暗示的、またはあいまいに描かれているもの。	
・	II ₉ 過大(果・花・葉)	果・花・葉が過大に描かれたもので、該当するものをチェックする。	
・	II ₁₀ 黒塗り(果・花・葉)	果・花・葉が黒く塗られているもので、該当するものをチェックする。	
・	II ₁₁ 地面に落ちている(果・花・葉)	地面に落ちている果・花・葉のうち該当するものをチェックする。	
・	III ₁ わくらば(病葉)	葉が、虫に食われたり、腐っているように描かれているもの。	
・	III ₆ 主題転換	一種の木に異種の果・花・葉などが描かれているもの。	
各種 参 考 指 標	I 発達遅滞と退行	コッホの挙げた発達遅滞と退行の特徴を示したもの。P.108～109を十分に読んで活用すること。「17. 冠形成不全」は、冠が年齢とともに形成されていく途中の段階で一つの過程として見られることがある。これは、そのまま発達の一つの段階としてはっきり同定できるときと、退行的指標となることもありうる(国吉政一提唱)。	
	II 運筆の動態分析(運筆における解釈仮説)	この表は国吉政一の実案(P.133～137)を簡略化したものであるが、さらにコッホの『バウム・テスト』P.99～100を参考にして利用する。ただし、各標識に対して、形態水準の高低によって解釈仮説を決めるのではなく、各標識は、それぞれPositiveな側面とNegativeな側面の両側面を持つものとして利用する。	
	III 樹木の発達(幹と冠の比率)	コッホは、ドイツ語版では、冠部と幹部の長さの比率が発達とともに変化することを、詳細な	

表2-6 「バウム・テスト整理表——手引——」（つづき）

	項 目	内 容	図 示 例
各 種 参 考 指 標	IV Grünwaldの空間図式	資料を挙げて示している。コッホの例示を参考にしながら、各バウムを測定して発達側面の検討の参考にすること。 なお、林勝造は、現代精神医学大系第4巻A：『精神科診断学Ib』（編集代表：懸田克躬他、第1章、P.18、中山書店、1978）の中で紹介しているので参照のこと。 この図式は、グリェンワルトの講義に基づいてコッホが単純化したものを林勝造が訳したものである（林勝造：現代精神医学大系第4巻A：『精神科診断学Ib』（編集代表：懸田克躬他、第1章、P.11～18、中山書店、1978）。また、林は、その著作の中で、コッホの十字象徴理論と空間象徴理論を詳細に紹介しているので参照すること。 さらに林は『バウム・テストの臨床的研究』（林・一谷編著、P.198～208、日本文化科学社、1973）の中で「空間象徴論考」と題した論文も発表しているので参考にすること。 なお、国吉政一も『バウム・テスト』（林・国吉・一谷訳、P.137～140、日本文化科学社、1970）の中で「空間象徴について」と題して紹介し、空間図式についても独自の見解を入れているので参照すること。	
	V Wittgenstein 指数	『バウム・テスト事例解釈法』参照のこと。	

「バウム・テスト整理表」が公刊されるにいたるまでの経過とその具体的内容とは以上に言及したとおりである。

V 「バウム・テスト整理表」の具体的使用

そこで、次の段階として、ここでは「バウム・テスト整理表」の具体的な使用の仕方について、症例をあげて説明してみることにしたい。

V-1 目 的

ここでは、4例の症例をあげて「整理表」の大きな範疇ごとにチェックの仕方を例示してみることを目的とする。ただ十分に注意すべきことは、ここでの項目チェックは、あくまでも、既に述べてきたところに従って、各項目の判断基準に依拠して正確にチェックするためのものであるから、それによって即座に解釈が可能であったり、ないしは、即座に診断可能であったりする性質のものではないことを念頭においてほしいということである。従来、ややもすると利用者間で、判断基準が異なったり、齟齬をもたらしたり、あるいは、曖昧であった項目もなきにしもあらずであるから、原著者コッホの精神と主旨にそって、できるだけ共通的、統一的にチェックの仕方をする方向にむかうのがここでの主たる目的である。

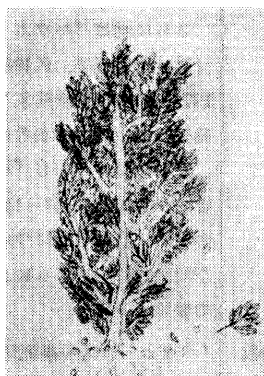
なお、この「整理表」を活用していくについては、「バウム・テスト——樹木画による人格診断法」（東京：日本文化科学社）と、「バウム・テスト整理表——手引——」（東京：日本文化科学社）を十分に活用しつつ行なっていくのが妥当であることはいうまでもない。

V-2 症例とバウム画

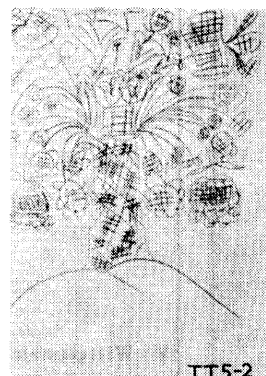
今回は、上記の目的に副って、症例の解釈は行わないけれども、参考までに、ここでとりあげる症例を簡単に表3に示しておく。また、これら4例のバウム・テストでの樹木描写は図1のA～Dに示すごとくである。

表3 症例の紹介

症例	性別	年 齢	症 状・診 断
A	男	9：6	場面緘黙・登校拒否
B	女	10：8	小児分裂病
C	男	11：10	孤立・場面緘黙
D	男	16：11	登校拒否



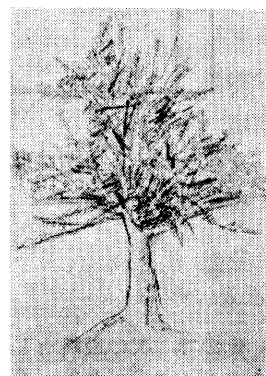
症例 A



症例 B



症例 C



症例 D

図1 4症例のバウム・テストでの描画

V-3 記入例と留意点

そこで大きな範疇ごとに4例についてとりあげて、チェック例を提示しつつ留意すべき点について記述してみることにする。

V-3-1 全体的所見について（表4参照）：

順を追ってみていくと、「Ⅰ 状況」は、本来は検査実施時の観察にもとづいてチェックすべきものであるが、これらの症状ではその点が不明であるがために、「8.その他」にチェックがされている。

「Ⅱ 利き手」については、すべて「右」

表4 4症例についての「全体的所見」のチェック例

		症例 A B C D			
全体的所見	I 状 況				
	※ 1. 拒否				
	※ 2. 課題外				
	※ 3. 描き直し				
	※ 4. 15分以上				
	※ 5. 30分以上				
	※ 6. 後から提出				
	※ 7. 命名(木の名称を記す)				
	8. その他	✓	✓	✓	✓
	II 利 き 手				
	1. 右	✓	✓	✓	✓
	2. 左				
	3. 両手				
	4. 不明				
	III 紙 の 向 き				
	1. 縦(たて)	✓	✓	✓	✓
	2. 横(よこ)				
	3. 斜(ななめ)				
	IV 木 の 数				
	1. 一本	✓	✓	✓	✓
2. 二本					
3. 多数					
4. 一部(部分描画)					
5. その他					
V 表現形式A					
※ 1. 絵画					
※ 2. 象徴画(擬人画を含む)					
※ 3. 図式画					
※ 4. 写実画	✓	✓	✓	✓	
VI 表現形式B					
※ 1. 立体描写				✓	
※ 2. 遠近描写					
VII 表現形式C					
※ 1. 図案画					
2. その他					
※ VIII 空間利用の領域(各領域の1/2以上の使用をチェックする)					
A (はみ出し)		B			
C (はみ出し)		D			
IX 強 調 A					
1. 冠強調(P.66 図24)	✓				
2. 幹強調(P.66 図25)				✓	
※ 3. その他の強調()					
4. 強調なし		✓	✓	✓	
X 強 調 B					
1. 右強調(P.90 図61)					
2. 左強調(P.91 図62)					
3. 平衡(中央)(P.91 図63)	✓	✓	✓	✓	
XI 傾 向					
1. 右への傾向(P.92 図64)					
2. 左への傾向(P.92 図65)					
3. 傾向なし	✓	✓	✓	✓	
XII 傾 斜					
1. 右への傾斜(P.93 図66)					
2. 左への傾斜(P.93 図66)					
3. 傾斜なし	✓	✓	✓	✓	

表5 4症例についての「風景および附属物」, 「地平」, 「幹の基部(根元)」などのチェック例

		症例 A B C D			
風景および附属物	1. 風景, 附属物なし	✓	✓	✓	✓
	2. 暗示				
	3. 多景				
	4. 支柱(P.94 図67)				
	5. 囲, 柵, 垣(P.101 図77)				
	6. 山(P.101 図77)				
	7. 崖				
	8. 川, 海, 湖				
	9. 附属動植物(P.102 図78)				
	10. 雲, 霞				
	11. 霧(つた)				
	12. 霜除(しもよけ)				
	13. 太陽				
	14. 人物				
	15. その他				
地 平	I 地 平 線				
	1. 地平線なし	✓			
	※ 2. 暗示				
	3. 傾斜(左上)(P.103 図81)				
	4. 傾斜(右上)(P.103 図81)				
	5. 水平(一線)				
	6. 水平(断線)				
	※ 7. プッシュ(プッシュが地平)				
	8. 液状				
	9. 島状または丘状(P.104 図82, 83)	✓		✓	
	※ 10. 複数の地平線				
	11. その他				
	II 地 面				
	1. 陰影なし		✓	✓	✓
	2. 陰影				
幹の基部(根元)	※ 3. 線影				
	4. 黒塗り(塗りつぶし)				
	5. プッシュのみ				
	6. 木の影				
	7. 広さ(地面面積大)(2.5, 8領域より上に描かれたもの)	✓			
	8. その他				
	地平との関係				
	1. 地平線が幹の基部より上にある場合(P.103 図79)				
	2. 幹線が地平に移行(P.103 図80)				
	3. その他				
	1. 紙下縁立(P.57 図3)			✓	
	※ 2. 幹下直(P.122 図6)				
	※ 3. 幼児型(2.幹下直以外のもの)				
	4. 左ふくらみ(P.58 図4)				
	5. 右ふくらみ(P.58 図5)				
6. 広い基部(P.58 図6)					
7. くさび型(P.58 図7)					
8. 根元わかれ型(P.59 図8)					
9. 普通	✓	✓	✓	✓	
10. その他					

利きである。「利き手」は、空間象徴や運筆等にそれなりの影響はあると思われるが、現在のところ、この点に関する研究が十分でないで今のところでは何ともいえない。

「Ⅲ 紙の向き」は、検査実施時には、画用紙（必ずA4判＝タイプライター用紙大のものを使用のこと）を縦向きにして配布しているが、それにもかかわらず向きを変えて描くことがある。

「Ⅶ 空間利用の領域」は、かなり重要な指標となる。バウム画1枚ずつに縦・横それぞれについて3等分、合計9分割された透明シート（領域シート）を当てがって、各領域について1/2以上描かれておればその領域をチェックするものである。具体的に、症例Bの場合については、地面の領域をどうとるべきか、かなり困難な面もあるが、丘状の左右の両端を線で結んだ領域で考えると、いずれも1/2以上には満たないので、チェックはしていない。もし、地面が画用紙の下方まで線影などで描いておれば当然チェックに該当するものと考えてよい。

「Ⅸ 強調A」は、症例Cでは他の症例とは相当に異なるが、幹と枝ぶりとの比較から「2. 幹強調」とした。なお、「3 その他の強調（）」は、幹や冠のほかに、根や実・葉・枝などを強調したのもありうるので、明らかに他の部分と比較して強調されている場合はチェックしておくのがよい。

V-3-2 「風景および附属物」について（表5参照）：

この「風景および附属物」は、画面に、樹木以外に描かれているものをすべてチェックするものである。児童の場合にはよく出現するものであるが、ここにとりあげた症例では、いずれも「1. 風景、附属物なし」に該当する。

V-3-3 「地平」について（表5参照）：

「Ⅰ 地平線」については、たとえば症例Dの場合であると、「幹線が地平に移行」している場合に該当するのではないかと判断で迷う可能性があるが、幹線と地平線とが、それぞれ、直筆と側筆（渴筆と潤筆）——鉛筆を立ててかいているか、ねかせてかいているか——とに区別して描かれているので、「5. 水平」でもなく、したがって、「9. 島状または丘状」の方でとってある。

「Ⅱ 地面」では、症例Aに関して、「8. その他」にチェックされているが、これは、根の描き方が断線となり、地面のあることを暗示しているので、そこにチェックしたものである。

V-3-4 「地平と木（幹基線）との関係」について（表5参照）：

症例Dについては、前述したとおりである。他の症例についても該当するものはみあたらない。

V-3-5 「幹の基部（根元）」について（表5参照）：

「幹の基部（根元）」については、どの程度のものをチェックするかの客観的判断を提示しにくいので、その判断はむずかしいが、「バウム・テスト——樹木画による人格診断法」での例示的な図を参考にしつつ明瞭なものをチェックするのが妥当である。

V-3-6 「根」について（表6参照）：

「Ⅰ 根の数」は、具体的に描かれている根の数をかぞえてチェックするとよい。

「Ⅲ 構成B」は、添付の透明シートを画面にあてがって、少しでも当該領域にかかっているおれば、その領域についてすべてチェックするのである。

V-3-7 「幹」について（表7参照）：

「Ⅱ 幹の位置A（X軸）」は、透明シートを画用紙の上からあてがって、X軸として、どの領域を使用しているかをチェックするものである。どの程度までをとるか、厳密にはむずかしい

が、ある程度当該領域に描かれていることが必要で、少しだけかかっているような場合はチェックしなくてもよいと考えられる。この考え方は、「Ⅲ 幹の位置B (Y軸)」についても同様である。

「Ⅳ 種類」では、症例Aは、よくみつめてみると、細くて曲がったりしているものの、幹の先端まで明確に描かれているので、「1. T幹」にチェックされている。

「Ⅶ 輪郭」についてみると、症例Dは、よくみると断線があり、これは1か所でもあればチェックするのである。

「Ⅷ 幹表面A」については、症例Cは「3. 線」と、「8. 全陰影」を重ねてチェックをした。

V-3-8 「枝」について (表8参照)：

「Ⅱ 構成」では、症例Aも主枝に二線枝が多く認められるが、よく観察してみると、一線枝が幹から出ているのが認められるので、「5. 混合」とされている。これも、1本でも混じっておればチェックしてよいと考えられる。

「Ⅲ 枝方向・経過A」は、描かれた枝の方向をみるもので、症例Bの場合は、上向枝も少し認められるため「6. 混合」とされている。

「Ⅳ 枝方向・経過B」のなかで注目しておきたい項目は、「2. 交叉した枝」で、これはコッホの「バウム・テスト」にも示唆されて

いるように、同じ枝から出ている枝が交叉しているものをチェックするのである。

「Ⅴ 枝方向・経過C」では、「9. 枝立体描写」は、症例Cにみられるように、主枝に1本でも立体描写があれば、チェックしておくのがよいと思われる。

「Ⅵ 枝方向・経過D」のうち、「6. 尖状枝」は、主枝・分枝のいかんを問わず、1本でもあればチェックしておくのがよいと考える。この点、症例Aは、わかりにくいけれども、よく観察してみると、多く描かれているのがうかがえる。

「Ⅶ 分枝方向・経過E」についてみると、症例Bも分枝に一線枝が描かれている。うっかりすると見落としがちになるため、観察は十分に入念に行なう必要がある。

V-3-9 「冠」(樹冠部) について (表9参照)：

「Ⅰ 輪郭」では、症例Bの場合、「遠心枝冠」のようにも思われるけれども、むしろ、「6. 放射線状冠」の方が妥当のように思われる。

「Ⅲ 特殊型」についてみると、症例Dの冠部が左右の部分が圧迫されてへこんだようになって

表6 4 症例についての「根」についての
チェック例

		症例 A B C D												
根	Ⅰ 根 の 数													
	1. 根なし		✓		✓									
	2. 一本													
	3. 二～三本													
	4. 四本以上	✓												
	※ 5. 多数													
	Ⅱ 構 成 A													
	1. 一線根(断線あり)													
	2. 一線根(断線なし)													
	3. 二線根(断線あり)	✓												
	4. 二線根(断線なし)													
	※ 5. 混合													
	Ⅲ 構 成 B (領域)(描かれた領域をすべてチェックする)													
	(A) (はみ出し) <table border="1" style="border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr><td>1</td><td>4</td><td>7</td></tr> <tr><td>2</td><td>5</td><td>8</td></tr> <tr><td>3</td><td>6</td><td>9</td></tr> </table> (はみ出し) (はみ出し) (添付のシートを画面の 上に当てて使用のこと)					1	4	7	2	5	8	3	6	9
	1	4	7											
	2	5	8											
	3	6	9											
	Ⅳ 構 成 C (形態)													
	※ 1. 長(ながい)													
	※ 2. 短(みじかい)													
	※ 3. 太(ふとい)													
	※ 4. 細(ほそい)													
	5. 開(先が開いている)(P.55 図1)													
	6. 閉(先が閉じている)(P.55 図1)	✓												
	7. 陰影あり													
8. 陰影なし														
9. 直根														
10. 曲根	✓													
Ⅴ 特 殊 型														
※ 1. 透写根(レントゲン描写)														
※ 2. 平行根(ずっと同じ太さの根)														
※ 3. 瘤状根														
※ 4. 蛇行根														
5. 先へいくほど太くなる根(すりこぎ型)														
※ 6. 渦紋状根														
※ 7. 爪状根														
8. その他														

表7 4症例についての「幹」の各項目のチェック例

症例 A B C D				
幹	I 樹 皮			
	1. 幹なし			
	2. 一線幹			
	3. 二線幹(断線あり)(P.59 図9)			
	4. 二線幹(断線なし)	✓	✓	✓
	II 幹の位置A(X軸)(3分割)(添付のシート使用)			
	1. 左出			
	2. 左(1.2.3.領域の系列)			
	3. 左中(1.2.3.4.5.6.領域の系列)			
	4. 中(4.5.6.領域の系列)	✓	✓	✓
	5. 右中(4.5.6.7.8.9.領域の系列)		✓	
	6. 右(7.8.9.領域の系列)			
	7. 右出			
	8. 充溢(いっぱい)(左, 中, 右)			
	III 幹の位置B(Y軸)(3分割)(添付のシート使用)			
	1. 上出			
	2. 上(1.4.7.領域の系列)			
	3. 上中(1.4.7.2.5.8.領域の系列)			
	4. 中(2.5.8.領域の系列)	✓		
	5. 下中(2.5.8.3.6.9.領域の系列)			✓
	6. 下(3.6.9.領域の系列)			
	7. 下出			
	8. 充溢(いっぱい)(上, 中, 下)	✓	✓	
	IV 種 類			
	1. T幹(マツ科型)(P.56 図2)	✓		
	2. 半T幹			
	3. 平行幹(P.63 図19)			
	4. つぎ木した幹(P.80 図45)		✓	
	※ 5. はんだづけ幹(幹上直)(P.122 図7)			
	6. 円錐幹			
	※ 7. 十字型			
	V 太 細			
	1. 太(指三本以上)			✓
	2. 細(指一本以下)	✓		
	3. 普通	✓	✓	
	VI 経 過			
	1. ふくらみ(P.64 図20)	✓	✓	
	2. くびれ(P.64 図21)	✓	✓	
	3. 先へいくほど太くなる幹			
	4. 管状幹(上開放)(P.74 図38)			
	5. 管状幹(上下開放)(P.74 図38)			
	6. きまよい型(P.82 図48)			
	7. その他			
	VII 輪 郭			
	1. 直線		✓	
	2. 波形線(P.60 図12)	✓	✓	
	3. 散漫な線(P.60 図13)			
	4. 断線(P.59 図9)			✓
	5. 幹左縁不規則(P.59 図10)			
	6. 幹右縁不規則(P.59 図11)			
	7. その他			
	VIII 幹 横 面 A (樹皮)			
	1. 白(空白)	✓		
	2. きず(P.61 図14)			
	3. 線(尖角直, きざぎざ)(P.61 図14)	✓	✓	
	4. 曲線(カーブ, 弧)(P.61 図15)			
	5. しみ(P.61 図16)			
	6. 左陰影(P.62 図17)			
	7. 右陰影(P.62 図18)			✓
	8. 全陰影(塗りつぶし)(P.86 図55)		✓	
	9. その他			
	IX 幹 横 面 B			
	1. 切り口			
	2. 瘤			
	3. 凹み(へこみ)			
	4. 洞(ほころ)			
	5. 魚鱗			
	6. その他			

表8 4症例についての「枝」の各項目のチェック例

症例 A B C D				
枝	※ I 枝 の 数			
	1. 枝なし			
	2. 一本			
	3. 二〜三本			
	4. 四本以上			
	5. 多数	✓	✓	✓
	II 構 成			
	※ 1. 一線枝(分枝なし)			
	※ 2. 一線枝(分枝あり)(P.79 図43)	✓		
	※ 3. 二線枝(分枝なし)			
	※ 4. 二線枝(分枝あり)(P.79 図43)		✓	✓
	※ 5. 混合(一・二線枝の)	✓		
	6. その他			
	III 枝方向・経過 A			
	※ 1. 全上向枝	✓		✓
	※ 2. 全下向枝			✓
	3. 右上向・左下向枝(P.88 図56・57)			
	※ 4. 左上向・右下向枝			
	※ 5. 水平方向枝			
	※ 6. 混合(上向・水平・下向)	✓		
	IV 枝方向・経過 B			
	1. 逆向きの枝(P.89 図58)			✓
	2. 交叉した枝(P.89 図59)			
	3. 枝交叉における枝の不連続性(P.90 図60)			
	4. たわみ枝(くねり)(P.97 図73)			
	5. きまよい枝(P.82 図48)			
	6. 方向のない結合枝(P.83 図50)			
	7. 枝切り型の枝(P.83 図51)			
	8. 直線と角ばりの枝(P.84 図52)			✓
	9. 丸い形の枝(丸味)(P.84 図53)		✓	
	10. ふくらみのある枝(P.64 図20)	✓	✓	
	11. くびれのある枝(P.64 図21)	✓	✓	
	V 枝方向・経過 C			
	1. 調のある枝(P.83)			
	2. 不連続線枝(P.78 図42)			
	3. 刈り取られた枝(枝先直)(P.94 図68)			
	4. 直交枝(P.81 図47)			
	5. 重複枝(P.81 図46)			
	6. 支えられた枝(P.94 図67)			
	7. 冠下枝(冠より下から出た枝)(P.67 図27)			
	※ 8. 地乎までの一線枝(Aste bis zum Boden)			
	※ 9. 枝立体描写			✓
	10. 切り口前突枝(P.95 図69)			
	11. 前方突出枝(P.98 図74)			
	※ 12. 切り口側枝(立体描写)			
	VI 枝方向・経過 D			
	1. 管状枝=開放形(P.74 図38)			
	2. 平行枝(P.65 図23)			
	3. 先へいくほど太くなる枝(きまよ型)(P.65 図23)			
	4. 棕櫚状枝(P.70 図32)			
	※ 5. 刀型枝			
	※ 6. 尖状枝	✓		✓
	7. 変質型			
	VII 分枝方向・経過 E			
	1. 分枝なし			
	2. 微細分化した分枝(P.79 図44)			
	※ 3. 直交分枝(P.123 図8)			
	※ 4. はんだづけ分枝(分枝先直)			
	5. その他			

表9 4症例についての「冠」の各項目の
チェック例

	症例	A	B	C	D
冠	I 輪 郭				
	1. 雲・ボール型冠(P.68 図28)				
	2. 枝先雲球状冠(P.69 図30)				
	3. アーケード型冠(連線)(P.70 図31)				
	4. アーケード型冠(断線)				
	5. 螺旋状冠(P.76 図40)				
	6. 放射線状冠(扇形)(P.73 図36)	✓			
	※ 7. 枝葉型冠				✓
	※ 8. 波状連線型冠				
	※ 9. 波状断線型冠				
	10. その他				
	II 内 容				
	1. 線影冠(P.85 図54)				
	2. 陰影冠(P.85 図54)				
	3. 縫(錯)線状冠(P.77 図41)				
	4. 求心枝冠(P.72 図34)				
	5. 連心枝冠(P.72 図35)				
	6. 散在管状枝冠(P.75 図39)				
	7. 微細分化枝冠(P.79 図44)				
	8. 封立枝冠(P.98 図75)				
	9. ずれ括弧枝冠(P.99 図76)				
	10. その他				
	III 特 殊 型				
	1. 袋垂れ下がり型冠(P.67 図26)		✓		
	2. 羊膜型冠(P.69 図29)				
	3. 棚状・盆栽型冠(P.71 図33)				
	4. 同心円冠(P.74 図37)				
	5. 角ばった冠(P.81 図47)				
	6. 押しつぶされた冠(P.96 図72)				
	7. 空白・白斑冠(P.96 図70・71)				
	※ 8. 十字架型冠				
	9. 吹き流し型冠(P.82 図49)				
	10. 棕櫚型冠(P.70 図32)				
	※ 11. 西洋型冠				
	12. 火炎型冠(P.66 図24)				
	13. その他				

いるが、これは、「6. 押しつぶされた冠」とはいえない。やはり、上方から冠部全体が圧迫されているものである必要があるので注意を要する。

V-3-10 「果・花・葉」(実・花・葉)について (表10参照)：

これについては、画面に描かれたものを、忠実にチェックすればよい。特に難しく判断に迷うものはあまりないように思う。

V-3-11 「発達遅滞と退行」について (表10参照)：

ここにとりあげられている項目は、「17. 冠形成不全」を除いて、いずれもチェック項目としてすでにコッホによって提唱されたものである。「17. 冠形成不全」については、国吉政一が提唱したものであることはすでに述べた通りである。

表10 4症例についての「果・花・葉」および
「発達遅滞と退行」の各項目のチェック例

	症例	A	B	C	D
果・花・葉	I 果・花・葉				
	※ 1. 果・花・葉なし			✓	
	2. 果のみ				
	3. 花のみ				
	4. 葉のみ(P.105 図85)				✓
	※ 5. 果と花				
	※ 6. 花と葉(P.104 図84)		✓		
	7. 果と葉(P.107 図88)	✓			
	※ 8. 果・花・葉				
	※ 9. 果・花・葉の暗示・あいまい				
	II 所 見 A				
	1. 空間倒置 I (P.123 図9)				
	2. 空間倒置 II (P.123 図10)				
	3. 空間倒置 III (I・II の混合)				
	4. 果・花・葉の常同(P.83 図51)				✓
	5. 果・花・葉の重積(P.81 図46)				
	6. 落葉(落下浮遊)(P.106 図86)				
	7. 落果(落下浮遊)(P.106 図87)	✓			
	8. 冠中浮遊果(P.108 図89)				
	※ 9. 過大(果・花・葉)			✓	
	※ 10. 黒塗り(果・花・葉)				✓
	※ 11. 地面に落ちている(果・花・葉)	✓			
	12. 裂果(さくろ型)				
発達遅滞と退行	III 所 見 B				
	※ 1. わくらば(病葉)				
	2. 花卉				
	3. 蕾(つぼみ)				
	4. いが				
	5. パナナ				
	※ 6. 主軸転換				
	1. 幹下棘立(P.57 図3)			✓	
	2. T幹、特に枝が下方についている(P.56 図2)	✓			
	3. つぎ木した幹、部分的に「ついで」ような枝(P.80 図45)		✓		
	4. 非常に小さい冠部(マッシュルームのような冠部が長短いすれかの太い幹の上についている)(P.66 図25)				
	5. 冠下枝(冠より下から出た枝)(P.67 図27)				
	6. 放射線状冠(一線枝)				
	7. 一線幹				
	8. 一線枝(P.79 図43)		✓	✓	
	9. 吹き流し型冠(P.82 図48・49)				
	10. 重積枝(P.81 図46・47)				
	11. 方向のない結合枝(P.83 図50)				
	12. 風景の強調(P.101 図77)				
	13. 幹の根元がまっすぐである(意味は軽い)				
	14. 紋切り型の枝(P.83 図51)				
	15. 明暗(P.85 図54, P.86 図55)				
	16. 角ばった冠(P.81 図47)				
	※ 17. 冠形成不全(冠形成の幼児型)				

表11 4 症例についての「運筆の動態分析」の各項目のチェック例

	Positive な側面	Negative な側面	A	B	C	D
1. 急 速	活 動 欲 ・ 感情性動性	不 穩 ・ 感情興奮性		✓		
2. 遅 緩	静 穏 ・ 平 静 化	不 活 発 ・ 冷 淡 淡	✓			
3. 弱 圧	敏 捷 ・ 繊 細 さ	意 志 薄 弱 ・ 不 安 定 性				
4. 強 圧	意 志 力 ・ 抵 抗 感	鈍 重 ・ 短 気	✓			
5. 潤 (側)	生のよろこび ・ 直 観 性	放 縦 ・ 粗 野			✓	✓
6. 渴 (直)	自己統制力 ・ 精 神 性	禁 欲 的 ・ 概 念 性				
7. 連 綿	論 理 性 ・ 組 織 的 思 考	思 想 貧 困 ・ 移 り 気				
8. 分 離	思 想 豊 富 ・ 直 観 能 力	飛 躍 性 ・ 抽 象 力 欠 乏				
9. 飾りたて		喝 采 願 望 ・ 自 画 自 賛				
10. おざなり		非 厳 密 性 ・ 狡 猾				

V-3-12 「運筆の動態分析」について (表11参照) :

運筆の動態分析のチェックは大へん難しいものである。そのひとつには、客観的な判断基準を示しにくい点にあるかもしれない。しかし、我々の考えでは、明確に判断できるものであれば、部分的であってもチェックすればよいように思う。しかし、決して無理にチェックする必要もないと思う。判断基準については、「バウム・テスト——樹木画による人格診断法」を十分に参考にするとよいだろう。

V-3-13 「樹木の発達」と冠と幹の比率の算出について (図2・図3参照) :

図2は、コッホがドイツ語版において提案したものである。〔これについては、山下真理子(1981)が我が国の幼児・児童についてほぼこれに近似した結果を得ていることは既に述べた通りである。〕図3は、冠と幹の比率の具体的算出方法を示したものである。我々のあげた症例についてみると、症例Cの場合、幹下緑立、幹上緑出であり、したがって実際には測定不可能なので除外されている。コッホの資料は幼稚園・軽度精神遅滞児・小学生・中学生といったふうに発達段階的にはやや粗いのが参考までに比較すればよい。また、山下真理子(1981)の研究結果が示唆に富んでいるため、これを参考にするとよい。

V-3-14 「Grünwald の空間図式」について (図4参照) :

解釈の参考までにあげておくが、より詳細には、「バウム・テスト——樹木画による人格診断法」を参考にするのがよい。

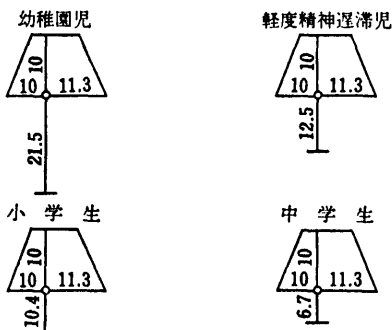


図2 樹木の発達 (幹と冠の比率)

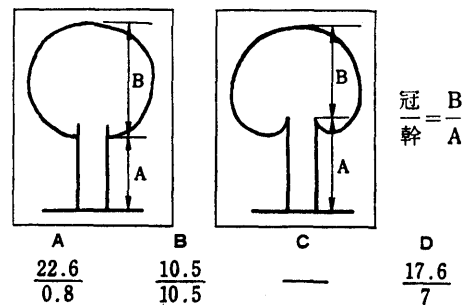


図3 冠と幹の比率の出し方と結果 (図2の「樹木の発達 (幹と冠の比率)」参照)

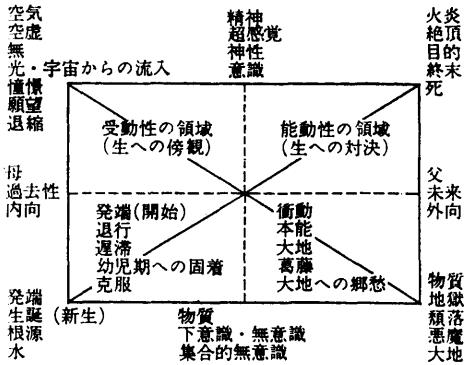
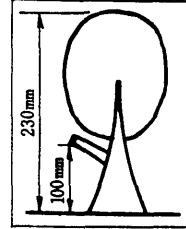


図4 Grünwald の空間図式



樹の高さ 230mm
 描画者の年齢 13歳
 $230 \div 13 = 17.7 \dots$ 指数
 切断された位置 100mm
 $100 \div 17.7 = 5.6$ (歳)

図5 Wittgenstein 指数の算出例

V-3-15 「Wittgenstein 指数」について (図5 参照) :

これは、コッホがドイツ語版のなかで、ドイツの精神科医であるヴィトゲンシュタインの発見したものを紹介したものである。それによると、バウム・テストに示される傷跡が、人生における心的外傷的 (traumatic) な出来事の生起との関係を示唆しており、その関係を計算によって推定できるとするものである。図5の場合を例にとれば、この Wittgenstein 指数を算出することで、5, 6歳のころに、何か人生における重要な出来事が起こったのではないかと考えるわけである。しかし、これについては、目下のところ今後の検討を更に必要とする面も多いように思われる。

以上、症例を通して具体的に『バウム・テスト整理表』のチェックの仕方を示したわけである。なお、ここで十分詳細に言及しなかったチェック項目について、とりわけ、例示した4症例についてチェックされたもので、付加的説明を行わなかった項目については、図1の4症例のバウム画を参照しつつ、該当チェック項目を見れば理解可能と考えて言及しなかったことをことわっておきたい。

VI 結論と要約

コッホの創出になるバウム・テストが我が国に導入されてほぼ20年を経過するが、その実施方法が簡便であるがために、往々にして誤まって安易に利用されている向きがないでもない。

かけがえのない被検者の臨床像を可能なかぎり間違いなく診断するためには、このテストの「整理表」を作製して、できるだけ誤りをなくすとともに診断指標となるものを見落とすことのないようにする必要性に迫られた。

そこで、我々は過去の臨床的研究やリサーチ的研究を基礎として「バウム・テスト整理表」とそれを利用するための「手引」とを作製したのでここにこれを報告し、かつ、具体的な利用の仕方を4つの症例について記述、報告した。

参 考 文 献

- 林 勝造・一谷 彊(編著) 1973 バウム・テストの臨床的研究 東京 日本文化科学社.
 Koch, C. 1952 The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis. Bern; Hans Huber.
 C. コッホ(著)・林 勝造・国吉政一・一谷 彊(訳) 1970 バウムテスト——樹木画による人格診断法——東京 日本文化科学社.
 Koch, K. 1949 Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern; Hans Huber.
 R. コッホ・林 勝造・国吉政一・一谷 彊(編著) 1981 バウム・テスト事例解釈法 東京 日本文化科学社.
 津田浩一 1980a 「バウム・テスト整理法」の紹介〔Ⅰ〕 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 9, 17-22.
 津田浩一 1980b 「バウム・テスト整理表」の紹介〔Ⅱ〕 心理測定ジャーナル Vol. 16, No. 10, 2-8.
 山下真理子 1981 バウムテストにおける発達の研究 心理測定ジャーナル Vol. 17, No. 11, 2-6.

Summary

Because of the convenience and the simplicity of test administration to subjects, Koch's Baumtest has been very frequently used for psychodiagnosis in clinical, educational, and research study.

In spite of this fact, the methods how to adopt the indicies and the ways how to interpret the adopted indicies which were advocated by K. Koch have been confronted with the considerably severe discrepancies among the investigators.

For these facts, the purpose of the present report was to prepare the tabulation sheet of Baumtest in line with Koch's spirit. In this report, therefore, the tabulation sheet prepared by the authors were described in small details on the basis of their past clinical and research experiences. In addition to it, using the four subjects, the method how to apply this tabulation sheet to the clinical cases was presented concretely.